

会報

安曇人

安曇誕生の系譜を探る会

CONTENTS

- 1 第2回あづみ・しかネット全国集会 安曇族サミット盛大に開催
 「安曇族サミット」を終わって… 第2回全国安曇族サミット実行委員長 細川修
 安曇族サミットを終えて…………… 安曇誕生の系譜を探る会 会長 金井恂
 第2回安曇族全国大会の向こうへ ……………… 丸山祐之
 第5回金印シンポジウム in 志賀島
 「日本の曙—海人族の活躍」に参加して…………… 松井昭
 砂鉄を求めて安曇野へ—② シナノは鉄の先進地だった… 小穴岳夫
 安曇の歴史と穗高神社—③ ……………… 山崎佐喜治
 編集後記「安曇族サミットを終えて」…………… 本郷敏行
 information 部会運営と研究活動への参加について

発行:安曇誕生の系譜を探る会 発行責任者:金井恂 編集委員長:本郷敏行 事務局長:浅川隆 〒399-8304 長野県安曇野市穂高柏原3612-3



▲第2回全国安曇族サミット 撮影:小松宏彰(会員)

第2回あづみ・しかネット
全 国 集 会

安曇族サミット盛大に開催 平成23年9月24日・25日

「あづみ・しか」全国ネット第2回全国集会安曇族サミットが昨年9月に開催された。あづみ族の全国展開「あづみ族のなぞ:いつ・どこから・なぜ」をテーマに全国ネットミーティングとシンポジウムを行った。

■全国ネットミーティング 9月24日(土)

参加地域:志賀島歴史研究会(福岡県福岡市)

米子市(鳥取県米子市)

安曇・あづみの会(滋賀県高島市)

太子町(兵庫県揖保郡太子町)

渥美町(愛知県田原市渥美町)

安曇誕生の系譜を探る会(長野県安曇野市)

亀山勝氏(ゲスト参加:歴史研究者)

各地域の現状報告がなされ、ネットの今後の進め方が話し合われた。あづみ、あづみの表記統一もとりあげられたが結論まで至らなかった。

尚、第2回あづみ・しかネット全国集会の開催に向けて20地域に呼びかけを行い15地域からご返事をいただきました。

■歴史シンポジウム 9月25日(日)

●基調講演

『歴史から見た安曇族』 講師:井沢元彦氏

●アトラクション

人形劇『カッパのなみだ』 ホーボーズ・パパットシアター

●パネルディスカッション

パネラー4名、当会でコーディネートを行いました。

●特別アトラクション

『志賀島盆踊り』志賀島盆踊り保存会

●物産交流

堀金物産センターで志賀島、渥美の特産品を販売。

■参加者・入場者

全国ネット関係者 16名(9地域参加・下関は25日)

来賓 18名

一般参加 466名

志賀島一般参加 50名

会員 83名(安曇誕生の系譜を探る会)

合計 633名

「安曇族サミット」を終わって 第2回全国安曇族サミット実行委員長 細川 修

海神を祀り、大地に鋤・鍬を入れて、かけがえのない私どもの故郷づくりに全力を注いだ先人たち…古墳時代(西暦570年頃)からの長い営みといわれますが、その古いルーツをたどりたいと活動を続ける私どもの願った大きな行事、「第二回・全国安曇族サミット」を二日間にわたって開催させていただきました。

「あづみ族の全国展開・あづみ族のなぞ：いつ・どこから・なぜ」を統一テーマに、「全国ネットミーティング」「井沢元彦・基調講演」「歴史シンポジウム」「ゆかりの地交流パーティー」「ゆかりの地特産フェア」など、いくつかの催しでした。私どもの会は、このテーマに関心をもって集まった素人の市民集団でございます。長野県、宮澤宗弘市長はじめ安曇野市、安曇野市観光協会、あづみ農業協同組合、全国の安曇族ゆかりの地の皆さん(19名ご出席)、当地元の皆さんの多大なご協賛・ご協力をいただきました。おかげさまで9月25日(日)の基調講演・歴史シンポジウムには、600名を越える皆様にご参会いただき、盛り上げていただきました。ありがとうございました。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

高島宗一郎福岡市長はじめ志賀島の皆さんには、60名でご来安いただき、穂高神社例祭の場において「志賀島盆踊り」「八女の舞(やおとめのまい)」のご奉納をいただきました。とくに「八女の舞」は、志賀海(しかうみ)神社門外不出の秘舞で、このたびは格別のご尊慮でございました。

ゆかりの地よりご出席の皆様には、りんごの木のオーナーになっていただき、りんごの実をさしあげ、喜んでいただきました。安曇野市・安曇野市観光協会のご高配によるものでございます。

また「安曇族サミット開催記念・特別番組」として、テレビ信州が同行取材を続けた「安曇野に集う海人の末裔たち～阿曇族の足跡を求めて～」が、23年10月30日(日)に放映され、ご好評をいただきました。

「われわれはどこから来たのか、われわれは何者なのか、われわれはどこへ行くのか」とは、ゴーギャンの人間の原点問う言葉ですが、昨今の索漠と不安な世界を思うとき、身につまされる思いがいたします。これに、「世界は人間なしに始まった。そして、人間なしに終わるだろう」(レビ・ストロース)と答えるのはあまりに愚かしく、寂しいことです。皆様のありがたいご協賛をいたいで催しのひとつがついた今、遠い祖先の苦楽に改めて心を致し、先人の足跡の残るこの故郷で誠心をこめて主体的に生きることの重みを痛感いたします。

何よりも私ども会員のそれぞれがこの貴重な意味をしっかりと踏まえ、種々ごやっかいいただいている組織・運営ともにしっかりと再確認すべき緒に当たっていると改めて感ずることでございます。今後とものご教導をお願いし、御礼の言葉とさせていただきます。

安曇族サミットを終えて 安曇誕生の系譜を探る会 会長 金井 恭

昨年の安曇族サミットは安曇族の歴史を軸とした安曇族ゆかりの地との交流事業として大きな成果をあげたと言えます。参加した安曇族ゆかりの地は安曇野市をはじめとして、福岡市志賀島地域、大川市、下関市、兵庫県太子町、米子市、高島市安曇川町、田原市旧渥美町の8地域で、この他に石川県志賀町、佐久市からの参加者もいました。また宮澤安曇野市長、高島福岡市長をはじめとして多くの来賓のご参加をいただきました。講演会およびパネルディスカッションでは、当初の予想をはるかに上回り総勢633名の参加がありました。ことに福岡市からは総勢で60名近いご参加をいただきました。参加者は安曇野市周辺ばかりではなく、東京、名古屋、大阪、福岡等々の遠隔地からの参加者も多数いました。

安曇族サミット開催に当っては、安曇野市の多くの企業団体から多大なご支援とご協力を頂き、また長野県からは多額の元気づくり支援金を頂きました。そして実行委員会および会員のみなさまには長い期間にわたって大変ご苦労していただきました。こうしたみなさまのご支援とご協力に対し、改めて御礼申し上げます。

今回の安曇族サミットを通じて感じたことは、地方における古代史というテーマに興味を持つ人たちが非常に多いということです。私たち安曇誕生の系譜を探る会のテーマである、自分たちの郷土の歴史つまり自分たちの祖先のルーツを探るということ、そして安曇族ゆかりの地と交流するということが多くの人たちに支持されていることを実感しました。

今回の安曇族サミットはお祭り的なイベントとしての華やかな面のみが印象に残り易いのですが、その表面的な面にとらわれることなく冷静に足元を見ることが必要です。つまり安曇族ゆかりの地との交流について、その原点を再確認しておくことが大事です。私たちの会は市民サークルという立場に立って郷土の歴史を探ること、安曇郡はいつの時代に、どのようにしてできたのかというテーマに取り組んでいます。するとすぐに、安曇族はいつ、どこから、なぜやってきたのかというテーマに基づつかります。これは安曇古代史の謎であり、大きな歴史ロマンです。これは、歴史史料が非常に少ないとあり、安曇平の中だけで考えているのでは不十分です。安

曇族が北九州から安曇平へ辿ってきた足跡を調べることが大事です。つまり全国に多数分布する安曇族ゆかりの地と歴史情報の交流を行い、それらを比較研究することによって、安曇族が安曇平へやってきた時代とルートが浮かび上がってくると考えられます。安曇族ゆかりの地はいまでは安曇族の痕跡は薄くなっていますが、地域の風土や生活慣習そして伝統文化などの地域特性の中にその名残が残っていると考えられます。すると、歴史ということに限らずに地域ぐるみに広げて交流することが望ましいと言えます。

私たちの活動は多くの人たちから注目をあび、期待されています。その期待に沿うために、しっかりやらなくてはいけないという、身の引き締まる思いがします。私たちが探ろうとしているテーマは深い謎の中にあり、簡単に見つかるようなものではありません。私たちが目指すものは、安曇郡の古代史の勉強をし、安曇族ゆかりの地と交流することです。あせることはありません、これから長い年月をかけてじっくりと着実に進めていくことが大事と考えます。

第2回安曇族全国大会の向こうへ

丸山 祐之



▲全国ネットミーティング



▲第2回全国安曇族サミット 基調講演

昨年9月24日25日に安曇野市において「あづみ・しか全国ネット」の第2回全国大会“安曇族サミット”が開催されました。この大会は安曇誕生の系譜を探る会を中心となりましたが、市内のいくつかの団体の協力をも得て実行委員会を組織し、企画・運営しました。また、安曇野市からも多大な協力を得て成功裏に終了しました。関係者の皆さんの大変なご苦労に改めて感謝申し上げます。

この大会は、我々安曇誕生の系譜を探る会の活動の一部を成すのですが、金井会長の言にもありますように、会の目的達成のための各論のうちの大変重要な部分でもあります。

第1回全国大会は、一昨年、福岡市東区志賀島で開催されました。ここで「あづみ・しか全国ネット」について簡単に述べておきます。

[ネットの設立の背景]

志賀島を拠点とした古代海人・阿(安)曇族は、北は青森から南は大分まで全国に約30ヶ所にもおよぶゆかりの地と思える地域に痕跡を残している。しかし、未知の部分が多いため、古代史の謎の一つともなっており、また興味をそられます。その謎に挑む全国連帯の組織です。

[活用内容]

①年1回全国集会を開催し、ゆかりの地との交流をはかる。②会報を発行し、情報を共有化する。③行政への働きかけ。④若い世代、地元への啓発。⑤ゆかりの地同士

で歴史・文化・物産などの交流。

以上が活動内容ですが、まだ発足したばかりの組織です。今後の試行錯誤の中で、肩の力を抜き、身の丈に合った活動を目指せればと願っております。

さて、大きな大会を経て我々は貴重な経験をしました。基調講演、それに続くパネルディスカッションを通して、皆さんそれぞれの思いを新たに持たれたのではないかでしょうか。会では、会の当面の勉強会として新たに設立された三部会を中心に活動してゆきます。各部会は既にスタートしておりますが、未だ参加されていない会員はいつでも、中途でも構いませんので是非加わっていただきたいと思います。

三部会：①安曇氏族部会 ②安曇野の歴史部会 ③安曇氏族ゆかりの地部会

最後に、会則にあります会の目的を述べて、上記三部会設立の主旨を合わせてご理解願いたいと思います。

①安曇野地域の古代史を研究し、安曇誕生のルーツを探ること。

②これまでの研究成果や安曇野の遺跡、遺物等を勉強し、会員相互の自由な議論を通じて古代史の認識を高める。

③目標とする歴史観は、学識論議とは離れて市民レベルのものとし、安曇野市民の理解できるものとする。

(編集後記参照)

第5回金印シンポジウムin志賀島

「日本の曙—海人族の活躍」に参加して

松井 昭



昨年10月15日に福岡市志賀島で開催された表記のシンポジウムに参加する機会を得た。

まず講演では「阿曇族と宗像族」の演題で福岡市埋蔵文化財センター元所長の塩屋勝利氏により、福岡市近隣に存在していた3つの海人族、綿津見三神の阿曇族・筒之男三神の住吉族・宗像三神の宗像族について話された。年代的には阿曇族が最も古く、続いて住吉族、最も新しく宗像族の順で阿曇族は外来文化を日本国内に伝承するどちらかと言うと内海型、住吉族は外敵から防ぐ外敵守護型、宗像族は航海安全・対外交渉等外洋型の性格を持ち、阿曇族が最も隆盛で白村江の戦いに阿曇連比羅夫を将として27,000人もの大軍を送り出し敗れた、その間、代りに古代国家の祭祀を統括した宗像族と地位が逆転したのではとの自説を紹介された。

続いて「古代海人族と金印」と題して同志社大学名誉教授森浩一氏が講演された。まずは金印についてで、金印は永い間ニセモノ説も言われていたが、中国雲南省石塞山にて同じ印(蛇紐)の金印が発見され、本物であることが証明されたと述べられた。つぎには「漢委奴国王」について奴国(ナ国)と委奴(イト国)の読み方で議論がなされているが、どちらが正しいか今の段階では難しいし、金印を奴国王が埋めたのか、糸島の王が埋めたのか、志賀島と糸島半島は近い所であり大きな違いでは無いとの話であった。また海人族がしていた入墨については「漁民が死んだ時、どの地の者か識別するためのパスポートだ」と言った大林太良氏の説を卓見だと評価された。

最後は「森先生を囲んでフリートーキング」の名目で志賀中学2年女子学生を含め、その他は各歴史の会にて

研究を進めている人達3名、計4名が参加して各種質疑が行われた。2点興味を持った物を紹介する。1点は志賀島のような小さな島に何故金印があったかと言う質問で、回答はどんな大国であれ大きくなる以前は軍略の拠点を島に置き、そこから安全を見て大きな所へ出て行く。当初は海人集団の首長が志賀島に存在、大切な文書の印を保管していたと考えられる。後漢滅亡でその役割が終わったとの事で、実に明快であった。続いては誰も興味のある邪馬台国は北九州・大和どちらと森先生は考えるかの質問に、はっきりとどちらと言うことは難しい、しかしいずれにしても北九州を中心とした文化は発展し、それが中央へ伝播したことは間違いない。邪馬台国であろうがなかろうが最初の中心は北九州であるとの回答に出席者より大きな拍手が送られた。

我々素人には難しい事であるが、森先生は歴史を勉強する限り原典を読み、現地を見よとも強く訴えられた。

歴史の大御所森浩一先生の講演を直に聴取でき、各種質疑にも明快なる考えをわかりやすく説明される姿勢に感銘を受けた講演会であったし、志賀島歴史研究会の地道な活動にも触れることができ、非常に有益な「金印シンポジウム」への参加であった。

また9月開催の「全国安曇族サミット」で60人近くの福岡市や志賀島の人々が安曇野市を訪問してくださいましたが、その人達より、ただ1人であったが安曇野市からの来訪と言うことでお礼の言葉や遠くからの参加を喜んで頂き、つくづく出席して良かったと思うと共に交流の成果を実感した。

砂鉄を求めて安曇野へ — ② シナノは鉄の先進地だった 小穴 岳夫

円筒形の鳴石を真似た、長さ三十粁程の鉄の筒に紐をつけ、鉢型の棒に六本を吊し、ガチャガチャ鳴らしながら歩いた。これを湛と言い、かつては御立産神事に先々の地で鳴らし諏訪神社の存在を示した。今も、後の世の物ではあるが、諏訪神社・小野神社でお宝にしている。

湛は諏訪湖が大きかった時代に湖畔だった、今の原村の地である。ここでは地中に鳴石が埋没しており、日本の各地では少量の鉄しか得られなかったのに、諏訪では困らなかった。

また、製鉄時の温度を上げるのに、縄文土器の底部の横に通風口を開け、上昇気流で、空気を導入する技術も発見し、一大工業地帯になった。神の作ったスズをミスズと言い、湖・湿地の多い信州では、絶えることなく刈り取れたので、ミスズ刈るが信濃の枕言葉になった。

中国や朝鮮半島より、砂鉄からの製鉄技術が伝わると、鉄の材質も良いこともあって、日本各地は砂鉄中心となる。伊勢の地も例外でなく、伊勢風土記には「伊勢津彦は信濃に住ましむ」とある。諏訪神社の洩矢氏の前の名は神氏なので、ここかと思ったら、読みがミワ氏であった。神をミワと読むのは、大和の三輪山の大神があるので、大和系と見た。すると、大町の仁科氏がある。仁科氏は武田勢に滅ぼされた時、系図など一切を焼却したので確認は取れないが、社地区的伊勢神宮は遷宮をしても、本家の伊勢神宮の型式を守っていることからも間違いないと思う。北安の地は今も湖・湿地があり適地と思われる。

砂鉄からの製鉄は、千二百度位の温度が必要で石炭・コークスなかった時代では難しかったと思う。自然の強い風、送風装置のタタラ、^{のば}_{かま}上り窯など工夫されたと思うが、方法によって鉄の質に差が出来た。古代朝鮮系の砂鉄の意の一つにスサがある。スサノオノミコトは自然の谷風利用派である。安曇野にも須砂渡の名がある。渡は川の合流点の意である。

砂鉄を多く含む地は、火山地帯と花崗岩地帯である。砂鉄を採取した川にサイ川の名がある。犀の字を使っても動物とは関係ない。古代朝鮮語の鉄または鉄製品の意のサヒから転じた語で、鍛も同様である。

琵琶湖東端に移住した一団に筑摩(チクマ・ツカマ)がある。万葉集にもその名を残している。鳴石から砂鉄に転換し信州へ。チクマ(筑摩・千曲川)。ツカマ(筑摩神社・東間の湯=浅間温泉)等の名を残した大集団で、リーダーは犬飼氏である。

安曇族は北九州を拠点とする海洋族で、海運・漁業・海軍などで勢力を伸ばし、政界でも有力者の一員であった。朝鮮で白村江の戦があり、日本・百濟の連合軍は唐の水軍に敗れ、百濟は滅亡し安曇族も力を失い、日本各

地に拠点を作り分散した。海運のみでなく、砂鉄よりの製鉄術に通じていて、安曇地方の砂鉄を求めてやって来た。自然風で製鉄のスサノオノミコト系のタケミナカタノ神は、通風装置のタタラ(踏鞴)利用のタケミカツチノ神と争い敗れた。鉄の質が悪かった事である。そこで、鉄の国諏訪へ飛んだ。諏訪はまだ鳴石利用を続けていたので、これには勝った。砂鉄を砂から分離するのには、川底に、藤蔓を筵状に組んで敷き、軽い砂は流し、多い砂鉄をその上に沈めた。この事から、藤枝をラセン状に編んだものを砂鉄派の旗標とした。鳴石派は前記の湛である。アメノウズメノミコトが天岩戸の前で舞った時に手にした千纏の矛が湛である。藤枝がタタエに勝ったが、日本一の鉄ではない。そこで安曇に眼を向け、妃を求め、製法を得た。妃の名は、ヤサカトメ(八坂刀売)。安曇族は仁科家と一体になっていた。

日本の研究機関は世界中の民族から血液の提供を受け、遺伝子の特徴を求めた。その結果は、黄色人種(モンゴロイド)は、中近東でヒマラヤ山脈の南北に分れた。北方系は蒙古・中国東北部・朝鮮半島・日本以北・中国周辺部少数民族・南北アメリカ大陸原住民。南方系は、インド・東南アジア・中国漢民族・台湾人など。日本人は琉球人・アイヌ人を含め遺伝子の変動が少ないと発表した。即ち、琉球の人達にも南方系の漢民族・台湾人・東南アジア人などの血は殆ど入っていない。アイヌ人と内地人との差はないということ。氷河時代に日本に移住した人達はシベリア方面からで、今の日本人に最も近い民族はバイカル湖周辺の人達で、言語も似ているとのこと。従ってアイヌ人とはグループの違いで、風俗・言語に差が生じたものである。最近、「日本人とアイヌ人は同一民族であるなどの暴言…」の記事があったが、遺伝子のことを知らない不勉強文である。安曇族の族は、単なるグループである。史学者は古文書重視で、その他のことをあまり問題にしない傾向だが、それでは、歴史の一部を伝えているだけである。

穂高神社のお宝が鍬だという。これは安曇族がここへ来たのは砂鉄を求めてであることを証明している。鍬の方言にカッサビがある。古事記にある韓鋤の転で、通ずるのは新潟だけである。すると、安曇族は信濃川を上り犀川・鳥川・高瀬川などで砂鉄を集めたことになる。良い鉄にするロクロの一部でも見つかれば百店満点。

今後の多方面の研究に期待します。

【参考文献】

- 古代の鉄と神々 真弓常忠(学生社)
- 御柱祭 火と鉄と神と 百瀬高子(彩流社)
- 新説 日本人と日本語の起源 安本美典(宝島社)
- 日本人はどこから来たのか 松本秀雄(日本放送出版協会)

安曇の歴史と穂高神社 —③…………… 山崎 佐喜治

■穂高神社の特色について

本殿の建築上の特色

穂高造りと呼ばれる流造りで、特に屋根の上の飾りである千木と勝男木に特色がある。千木は屋根の左右両端の×印上のもので男神なので先端は地面と垂直にきられ、勝男木は主稟中央から発して両側で、千木と直角に交差して貫くもの。そのほか他に例を見ない比較的に簡素化された独特の造りも見られる。造宮については、江戸時代の初期まで7年ごとに造宮されていたが、寛文9年(1669年)以降20年に一度の造宮となった。実際には3つの本殿を20年おきに1つずつ造り替え、各本殿の使用期間は60年毎になる。作り替える時古いものを左右に引いて、4つの敷地の内、空き地を中心のご神木の左右いずれかの側に造り、そこに神殿を建て穂高見命を入れる。ルールとして本殿の移動はご神木をまたぐ事はしない。これは古代安曇人の知恵の結晶だと云われている。なお20年に1度というのは次世代への神社建築(宮大工)の技術伝承のための良きサイクルといえる。これにより、歴史ある神社ではあっても建物が国宝になり得ない宿命をもつ。国宝の多い寺院などとの違いでもある。

穂高神社の神紋と鳥居

家紋と同じように神社にも神紋がある。穂高神社は16枚の花弁の菊のご紋章で、伊勢神宮も16菊花。皇室に配慮し2枚減らしてあるという。菊は、巴、桐に次いで多い神紋。鳥居は諏訪大社と同じ明神鳥居で、比較的複雑な造りで、優美なものとなっている。

奥宮(奥社)及び嶺宮(嶺社)について

上高地及び穂高岳頂上に、奥宮及び嶺宮がある。奥宮の起源は元禄時代以前と考えられる。穂高神社が持っている奥宮に関する最も古い文書は、1693年(元禄6年)の「穂高三之宮」で、そこに祭神は天津彦火々瓊々杵命となっている。また、60年前頃の神社概説には、奥宮祭神は穂高見命、嶺宮の祭神も同様に穂高見命となっている。1808年(文化5年)に「延喜式神名帳」に従い改めた様である。また、この頃より20年毎に奥宮の御造宮を行っている。嶺宮の建立は大正の末期頃で木造であった。今日では石造の本造りになっている。

祭りの特色について

お船祭りを行う点で海人系の祭りとされ、先祖の安曇族の伝統が今に伝わっているとされている。

春3月17日の奉射祭(御奉射)は悪魔を祓い、国家の平安を祈り、五穀豊穣、氏子息災を祈念する神事で、「神の矢、殿の矢を勅使殿から東北東南の木立にはなち、さらに12本の鏑矢を神楽殿の前に射る」ものである。歩射社、武射、奉射と時代により呼び名が変わっている。

現在奉射となつたのは幕末の頃で、本来、年の初め(正月)に行われていたが、新暦の以後3月となり、年占いの意味が消え、一時期養蚕の神様としてもてはやされたり、今は弓道の神様のごとき感もある。また、4月中旬には、夜桜の下で学問の神様である天神様の祭りがある。

秋祭りは9月26・27日が本宮例大祭の日とされ、その前にも末社の伊勢宮、鹿島、若宮(古くは4月8日)などをまとめて9月初めの日曜日に子供祭りとして行われている。大祭の舟のぶつけ合いが海人族会戦のなごりだともいわれる。(一説に安曇の治水開拓の時の名残ともいう。) 例大祭の舟は5艘で、内2艘が大型のもの。この2つが祭りの最後にぶつけ合いをする。奥宮のお船神事は10月8日に行われ、龍の首を飾り付けた舟が明神池を奏楽しながら巡る。平安朝の古式豊かなお祭りとして知られている。

遷宮祭と人形飾り物

遷宮祭は本殿の建て替えまたは破損修理をし、祭神の宮殿の移動を行う祭りで、それにともない毎回人形飾りが奉納され人気を呼ぶ。その特色は、毎回場面を変えて作り直す事。独特の技法を代々に伝えた一種の農民芸術で、神社の大木や池を巧みにとりこむこと。神話、説話、軍記物、など大衆の目線で捉えた題材であること、など。県指定の文化財になっていて、国の指定を目指している。発祥は平安時代と言われるが、古文書の記録では1711年(正徳元年)熊坂長範のものが伝えられている。

■安曇統治の歴史と神社の変遷

①奈良時代の「和名類聚抄」には、高家郷、八原郷、前科郷、村上郷の4郷からなる安曇郡が成立していた。安曇族は物部氏、蘇我氏等が台頭する以前の天皇家直属の最強の軍で、安曇の治水の功績もあったとされる。

②1460年代(応仁の乱)以降、朝廷の勢力が衰え、天皇の祈願所であった穂高神社も、領主によって造営される運命となる。

③武家の時代に至り、後土御門天皇(1483年)～正親町天皇(1585年)に至る約100年の間は、武将大伴氏、仁科氏が安曇地方を領す様になり、累代穂高神社に崇敬の念が篤く、式年の造営に際して、下知状を下して安曇60余郷一円にわたる広範囲に所役を課し、金穀を賦し、神事を斎行して、神社の発展に尽くした。その範囲は現松本市の島内(村)にまで及び壯觀を呈した。「三宮穂高社御造宮定日記」11巻のうち4巻が完備。

④その後、戦国時代に入り、穂高周辺も甲越攻伐(武田と上杉の戦い)の巷となり、神社並びに仁王門を除く神宮寺が焼かれ、神社の古い記録や宝物の大半が灰じんに帰し、神社も衰退した。その中で、天正年間、松本城主小笠原

貞慶は、社領15石、神宮寺領3石を寄進。また文禄年間に豊臣秀吉は、御朱印15石、神宮寺領3石を寄進した。

⑤江戸時代に至って、後水尾天皇の慶長19年(1614年)小笠原秀政が松本藩に入封、かつての仁科氏の古例に則って、領内広く造営費を徴し、国印10石及び糲25俵、祭免6俵、湯立免9俵を献納した。以来、全時代を通して松本藩の尊崇があり、慶長年間には禁制を下し、社領を安堵(江戸幕府は、「社領安堵の証明書」として将軍の朱印を押して交付し、社領地を寄進。そこからあがる收入で神社の経済を支えた。)を出し、式年の造営を厳修し、臨時の修繕も行っている。

⑥寛永の(1638年以降)頃、藩主堀田正盛が神宮寺及び宮奉行を廃止し、神主を置き郡奉行・作事奉行に統轄した。

宝永5年(1708年)藩主水野忠直は、神宮寺の仁王門及びその仁王像を、忠直の菩提寺である松本・大村の玄向寺に移した。

享保11年(1726年)藩主戸田光慈が入封、また今までの慣習を踏襲した。そして藩主自ら社参し、祈願をして

◆安曇氏とはどんな人か

安曇氏の系譜と根拠地(新撰姓氏録・弘仁6年<816>)

○安曇連(あづみのむらじ) 河内(境) 内膳の司(朝廷の食事役や海運の主)、海人の宰(応神天皇より)

○安曇宿禰(あづみのすくね) 摂津(大阪) 右京 海運

○凡海連(おおしあまのむらじ) 摂津(大阪) 右京 海運
安曇族は、元は中国・吳の技術集団が志賀島付近に来て安曇氏となり、彼らが連れてきた農民が弥生時代に安曇野に住み着いたという。(亀山勝『安曇族と徐福』より)

◆安曇族の進入路は

	諸 説	利 点	疑問点	支持者
A	姫川朔行説	日本海沿岸	急流である	大場盤雄氏・穂高神社
B	信濃川朔行説	傾斜緩やか	遠回りである	亀山勝氏
C	木曾川朔行説	伊那谷経由	途中で山道に	一志茂樹氏、小穴芳美氏
D	利根川朔行説	傾斜緩やか	南方から遠い	(宮地直一氏は明言せず)

穗高出身の青木治先生は、糸魚川～姫川～仁科三湖～安曇野とし、大場氏同様、銅剣や翡翠(ひすい)を証拠にあげる。木曾川も信憑性は高いとする。

倭名類聚録													
蒲原郡青梅郷	羽咋郡大海郷	坂井郡海部郷	渥美郡・渥美郷	小県郡海部	安曇郡	長上郡碧海郷	敷知郡海間郷	渥美郡磯部郷	幡豆郡磯泊郷	碧海郡碧海郷	中島郡	山田郡	海部郡海部郷
(新潟県) 越後国	(石川県) 能登国	(岐阜県) 越前国	(岐阜県) 美濃国	信濃	静岡	三河	三河	尾張	尾張	尾張	尾張	尾張	尾張
蒲原郡青海神社(稚根津彦命)	羽咋郡相見神社(縹津見を祀る。縷津見三神)	坂井郡大瀬神社(海部郷は雄島にある。その氏神が当社事代主命・大物命外)	方県郡方県津神社(方県郡方県津神社)	小県郡生鳩足鳴神社(生鳩大神・足鳴大神)	安曇郡穗高神社(穗高見命・綿津見系)	敷知郡津毛利神社(港守の神社・筒男三神)	宝飯郡御津神社(機部海人族)	碧海郡知多神社(綿津見系)	中島郡宗像神社(宗像三神)	津島神社(須佐之男命、古事記・海原統治の神)	山田郡綿神社(綿津見三神)	山田郡綿神社(綿津見三神)	津島神社(須佐之男命、古事記・海原統治の神)
頸城郡青海神社(稚根津彦命)	羽咋郡相見神社(縷津見を祀る。縷津見三神)	坂井郡大瀬神社(海部郷は雄島にある。その氏神が当社事代主命・大物命外)	方県郡方県津神社(方県郡方県津神社)	小県郡生鳩足鳴神社(生鳩大神・足鳴大神)	安曇郡穗高神社(穗高見命・綿津見系)	敷知郡津毛利神社(港守の神社・筒男三神)	宝飯郡御津神社(機部海人族)	碧海郡知多神社(綿津見系)	中島郡宗像神社(宗像三神)	津島神社(須佐之男命、古事記・海原統治の神)	山田郡綿神社(綿津見三神)	山田郡綿神社(綿津見三神)	津島神社(須佐之男命、古事記・海原統治の神)

いる。(松本藩5代藩主光悌、安永5年・1776年9月、一行143人で社参したという東大祝文書が現存)

⑦明治となり時勢一変。王政維新となり、神社経営は全額民費負担となり、神社は衰退の道をたどる。明治5年、郷社に列し、明治15年県社に昇進。昭和9年3月、官社昇格の願書を提出。

⑧昭和15年11月(1940年)、十数年来の念願がかない、国幣小社に昇格。再び官費による神社に復帰。その後終戦を迎える。昭和24年が正遷宮の式年であったが、戦後の混乱で本殿の新築を行わずに、本殿、左右殿、神名社の移動のみを行う異例の式年祭となる。以後は式年毎に正遷宮と御破損を行って来ている。

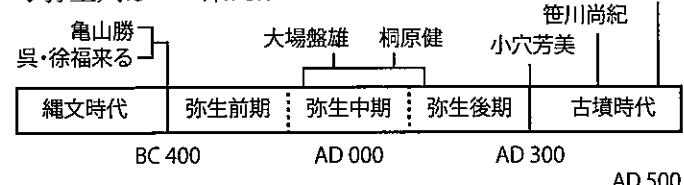
【参考文献】

- | | |
|-----------------|--------------------|
| 「海神族の東移と穗高神社」 | 上条 助市 1942年(私家本) |
| 「穗高神社とその伝統文化」 | 青木 治 1988年(穗高神社) |
| 「安曇野大紀行」 | 田中 欣一 他 2006年(一草社) |
| 「安曇・筑摩 その伝統と歴史」 | 巻山 哲雄 2010年(私家本) |
| 「安曇野の先覚者 高島章貞伝」 | 山崎 佐喜治 2009年(一草社) |
| 「信濃安曇族の謎を追う」 | 坂本 博 2003年(近代文芸社) |

◆安曇族の特徴は(魏志倭人伝『三国志』より。実は怪しい。)

①入れ墨をし、潜って魚をとる。 ②首穴あきの布を着て麻と蚕糸を用いる。 ③航海中、持斎と呼ぶ男が船首に立つ。(縄文人と弥生人とは実際に頭骨が違う)

◆弥生人はいつ来たか



◆ルーツ探しの問題点

- ①安曇の歴史とは… 原始・縄文人が住んだ時か、弥生人が水田を始めた時か。安曇氏がきた時か。安曇郡が出来た時か …で違ってくる。
- ②安曇族とは… 安曇野に最初に住んだ縄文人とアイヌたちか、水稻と鉄器文化を持った弥生人か。今の我々の先祖なのか、志賀島からの安曇氏の末裔かで違う。
- ③縄文と弥生の絶対年代をどう決めるか。土器か、米の生産様式かで違ってくる。

編集後記

安曇族サミットを終えて

昨年9月末に開かれた安曇族サミットは、大勢の方々に参加いただきて無事終了した。

このサミットは正式には「あづみ・しか全国ネット第2回全国集会」である。一昨年第1回が九州志賀島で行われ全国から7団体が加盟して発足したものである。今回第1日目はネットミーティングとして会議がもたれ、この組織について、加盟呼び掛けや、運営、活動方針が討議されるはずであったが、準備不足や時間の制約で不十分であった。今後加盟団体間で協議し情報交換、研究成果の共有、人的交流や共同研究を一層進展させる方法を講じなければならない。

さて、我々がもう一つ考えなければならないことは、過去2回に亘る交流会と昨年のシンポジウムで得たものを放置しておいてはならないということである。せっかく貴重な講演や討論をいただいたのだから、これから勉強会においてこれを活かさぬ手はない。前回の基調講演では笹沢先生の言われる、安曇族という呼び方への疑問である。出雲族、安曇族などという呼び方は数少ない特異な例であり、安曇族の場合はこの安曇の地に痕跡が発見されていないという。文献資料の乏しい安曇族についていえば、物的資料(考古学)に頼らざるを得ないのが実情ではないか。北安曇郡史は「安曇族」は誤解を招き易いので使用しないとしている。

また、今回の井沢講演についても数多くのセッションをいただいている。これについて何らかの方法で討論を行う必要がありはしないか。その中のいくつかを挙げてみたい。

○安曇族は海の民族である…といえるか。なぜ内陸に追われたか、又は自主的に移動したか。

○殷の商族の例は何を意味するか。

○安曇族は日本の国家の成り立ちにどう関わったか。

○日本列島の王朝はだれがつくったか。イングランド王の例は何を意味するか。建国神話の解釈は。

○日本列島の先住民とはだれか。

○大和民族の心とは。

以上は一例であるが会員の皆さんはそれいろいろにとらえられていると思う。是非みんなで議論してみたいものである。

そうすることは我々の会の目的に十分沿っているし理念にもかなっていると思う。

改めて我々の目的と理念を確認する。

目的：○我々の祖先のルーツを探りたい。安曇郡の建郡と安曇族のかかわり。

○安曇古代史の仮説をつくりたい。

理念：○自由な発想で、いろいろな議論を認めあう。

○素人の立場で自分たちで考えよう。

information

部会運営と研究活動への参加について

平成23年春、古代史の研究を深めるため下記3部会が発足しました。安曇族サミットでは、研究成果のパネル発表やゆかりの地との交流等の部会活動を行いました。

会員相互の学び合いを通じて故郷の歴史認識を深めることを

目的に、部会ごとに部会長を互選して下記の研究活動を行っています。運営委員会では、部会を中心にした活動で運営する方針が決定されました。会員の皆さんには、積極的に部会にご参加くださいますようご案内します。

【「安曇野の歴史」部会】

◆安曇野の古代史年表の制作

- 安曇野市5地域の古代史を統合
- 世界史・日本史との関連
- 年代・時代の確認

◆安曇野の古代史資料

- 遺跡・史跡・神社・仏閣等
- 安曇野古代の歴史的背景
- 安曇野5地域の特徴と関連

■部会活動と学習テーマ

- 月に1回勉強会を開催
- 「古代安曇野の稻作」を学習する

【「安曇氏族」部会】

◆安曇氏族の由来(伝説・伝承)

- 海神・海人氏族
- 氏族の誕生と広がり
- 安曇氏族の信仰
- 安曇氏族の歴史
- 安曇氏族の出現
- 大和朝廷と安曇氏族
- 安曇氏族の能力・技術
- 信濃安曇氏族の研究
- 部会活動と学習テーマ
- 月に1回勉強会を開催
- 安曇族研究史・穂高神社をテーマに

【「安曇氏族ゆかりの地」部会】

◆ゆかりの地調査

- 安曇氏族の関連する地域
- 関連する他氏族の地域
- 関連地域との連携
- 研究課題の共有化
- ネットワークの維持と拡大
- 部会活動と学習テーマ
- 部会開催は不定期
- ゆかりの地についての学習と実際に現地を訪問する視察旅行を実施する



安曇誕生の系譜を探る会

会報発行：平成24年2月

事務局：〒399-8304 長野県安曇野市穂高柏原3612-3 事務局長 浅川 隆
Tel.0263-82-4056 Fax.0263-82-7247 E-mail:asakawa.takasi@lapis.plala.or.jp



安曇之祖神 穂高神社

安曇野市穂高6079 電話 0263-82-2003 http://www.hotakajinja.com

穂高人形飾物と道祖神展
資料館御船会館

電話 0263-82-7310